

一八八三年五月二日(水)

ナンダン・バガンのブラフマ協会でラカール、校長など信者たちと共に

礼拝所を見ることがと靈的恍惚——聖ラーダーの狂おしい愛

聖ラーマクリシュナは、ナンダン・バガンにあるブラフマ協会サマージの礼拝堂に信者たちと共に坐つていらつしやる。そして、協会の会員たちと話をしておられる。ラカール、校長などがお伴をしてきた。時間はやがて午後五時になるところ。

会場となつている故・カシーシュワラ・ミトラ氏邸はナンダン・バガンにある。彼は地方裁判所の主席判事であつた。アーデイ・ブラフマ協会の熱心な会員で、自分の邸の二階の大広間を礼拝所にして、時どき会員たちを招待しては盛大な祭を催していた。他界後は、スリナート、ジャガンナートをはじめ、彼の息子たちが同じような祭を催し、聖ラーマクリシュナを丁重にお招き申し上げた。

タクールは初め、階下の応接間に入つてお坐りになつた。その部屋には、やがて次第にブラフマ会員たちが集まつてきた。ラビンドラ様はじめ、タゴール家の方々も数人、この祭に来ておられた。

主人側の人に案内され、タクールは信者たちといつしよに二階の礼拝室に入つてお坐りになつた。

礼拝室の東側に壇が設けられてあり、南西の隅にイギリス製のピアノが一台おいてある。北側には数脚の椅子が並べてあり、その東端にドアがあつて、奥に行けるようになってゐる。

夕方になつてから、祭の儀式が行われる予定になつてゐる。はじめに、アーディ・ブラフマ協会のバイラヴァ・ボンドパツダエ氏が、一、二人の会員と壇に上がつて祭式を執り行う筈である。

今日は水曜日でチヨイトロ月黒分十日目。キリスト暦一八八三年五月二日。暑い盛りである。ブラフマ協会の会員たちが大ぜい、広い中庭やベランダを往來してゐたが、ジャナキー・ゴーシャル氏たち何人かは、タクール、聖ラーマクリシュナについて礼拝室に入り、席に着いた。タクールの口から、神様の話をおききするつもりなのであろう。

タクールは部屋に入るとすぐ、壇に向かつてお辞儀をなされた。それから席にお着きになると、ラカールや校長たちに話しかけられた――

「ナレンドラがわたしにこう言うんだよ。『協会の礼拝室なんかで拝んで、いつたい何の意味があるんですか』ツて。わたしはね、礼拝堂やお寺を見ると、あの御方のことを思い出すんだよ。しげさされるわけだ。あの御方のことを話している場所には、ちゃんとあの御方が来ていなさる。聖地にいるのと同じことさ。だからそういう場所を見さえすれば、わたしは至聖さまのことを思い出す。

ある信心深い男は、バブラの木(アラビアゴムモドキ)を見て前三昧になつた！ ラーダーカーンタ堂の庭で使う斧の柄が、この木で作られてゐることを思い出したんだよ。

また一人の信者は、自分の師を大そう慕つていたので、師の町内に住んでゐる人に会つてさえ、胸

が熱くなったそうだよ！

雲を見たり、青い着物を見たり、クリシュナの絵を見たりすると——シユリー・マデー聖女(ラーター)はすぐクリシュナのことを思い出した。ラーターはこういうものを見るとすぐ狂ったようになって、『クリシュナ様はどこ！』といって探しまわったもんだ』

ここでゴーシヤル氏が口をはさんだ。

ゴーシヤル「何事にせよ、狂ったようになるというのは、感心しません」

聖ラーマクリシュナ「なぜだい？ 俗世のつまらんことで気がふれて正気をなくしているんじゃないだろう？ これは、至聖なるものに想いをこらしてなった状態だよ！

神に対する愛ゆえの狂気とか、真智を求めての物狂いとか——あんた、聞いたことないのかい？」

〔方法——神を愛し六つの情熱を方向転換させる〕

一会員「どんな方法で神にふれることができるのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方に恋こい焦こられること。そして、いつ、どこにいても分別グイチャールを忘れないこと——神のみが永遠の実在で、世界は一時的なものだということを。アスワッタの樹ツだけはいつまでもあるが、果実は一日、二日だけのもの」

一会員「色情や怒りのような激しい感情を私どもは持っておりますが、これをどうしたらよろしいでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「そうした六つの情熱リッパ、敵カの意もあるを、神さまの方に向けかえてやれ。色欲は、アートマン(真我)と交わりたい欲にかえること。

神への道を邪魔するものに、怒りを向けること。

役にもたたん事物ものを貪むさぼる代わりに、神を手に入れようと貪欲になること。

「私のもの、オレのもの」と言い張りたいなら、あの御方を自分のものにする——つまり、私のクリシュナ、私のラーマ」という具合にね。

もし、どうしても高慢でいたいのなら、じゃ、ヴィビーシャナのまねをしたらどうだね？——私はラーマに頭を下げたのだ。この頭を、ほかの誰にも下げてやるものか！」

一会員「あなた様はいつも、『神がすべてをなさる。あらゆることは神がさせるのだ』とおっしゃいますが、では、私どもは罪惡に対して何の責任もないのですか？」

[Free Will(自由意志)——Responsibility(責任)]

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハ。ドウルヨーダナも同じことを言ったね——『おお、フリシークーシャ(クリシュナ)よ、私の胸に宿っておられるあなたが、私にさせようとしている通りに私はいたします』と。(訳註、フリシークーシャ——感覚の支配者を意味するクリシュナの別名)

ほんとうに正しい信念を持っている人——神こそが行動者であって、自分は全くの受動者、命令通りに動くものにすぎない、という信念をもっている人は、いわゆる罪なことや悪いことを絶対にしな

いよ。

踊りを正しく習って熟練した人は、間違つたステップなど踏まないものだ。

心の奥まで清浄きれいにならないうちは、神が存在することさえ信じられないんだよ！」

タクールは礼拝室に集まっている人たちを眺めながら、こうおっしゃった。

「時どき、こんなふうに皆で集まって神のことを考えたり、称名したり、讃歌をうたったりすることは、大それたことだ。

だが、世間の人が神に心を向ける時間はホンの少しだ——焼けた鉄に水をふりかけるとジュウツと  
いって蒸発する、その時間くらいのものさ！」

〔ブラフマ協会の礼拝式と聖ラーマクリシュナ〕

間もなく礼拝式が始まる。広い礼拝室はブラフマ協会の会員でいっぱいになった。数人の婦人会員が部屋の北側に並べてある椅子に坐つた——手に歌の本を持っている。

ピアノとハルモニウムアコーディオン（手風琴のようなインド式オルガン）の伴奏で、ブラフマ協会の歌の合唱が始まつた。タクールはもう、嬉しくて楽しんでどうしようもないご様子である。

次いで開式のことば、祈詞、礼拝。壇上アークイリーヤの教師たちがヴェーダマントラのなかから真言を朗誦し始めた。

オーム、おんみは我らが父

われらに真まことの智識を授け給え——  
われらを破壊し給うな

会員一同は、教師の先導で声をあわせてとなえる。

オーム 実在にして真智無限なる梵ブラフマン

不滅の歓喜に輝きわたるもの

平安にして二つなくめでたきもの

清浄にして一点の汚れなきもの——

こんどは教師たちが讃歌をうたう。

オーム、帰命す、真理にして宇宙の因たる御身に

オーム、帰命す、真智にしてすべての人の守護者に

讃歌が終わると、教師たちは祈詞を捧げる。

非真理より我を真理へと導き給え

暗黒より我を光明へと導き給え

死より我を不死へと導き給え

生々世々、かぎりなくおわしまして

ルドラよ 御身のやさしき顔をもて

われを永遠に護り給え——

ルドラはシヴァ神の一名

讃歌をきかれたとき、タクールは前<sup>パーヴァ</sup>三昧<sup>ツァ</sup>になられた。次に、教師たちは何か論文のようなものを読み上げた。

〔至高の歡喜に溢れた聖ラーマクリシュナ——無条件の慈悲の海〕  
禮拜式は終了した。

ルチ(小麦で作ったインド式のパン)や菓子などを出す準備をしている間、会員たちは下の中庭やベランダに出て、新鮮な空気を吸ってくつろいでいる。

もう夜の九時ごろになった。タクール、聖ラーマクリシュナは、ほつほつ<sup>ドフキネンシヨル</sup>南神寺にお帰りにならなくてはいけない。家の人たちは大ぜいの招待客の対応に忙殺されていて、タクールの方に気を配ることができないでいる。

聖ラーマクリシュナ、ラカールたちに向かつて――

「やれやれ、誰もかまってくれないね！」

ラカールは憤慨して――

「先生マハシヤ（聖ラーマクリシュナのこと）、出ましょう！  
南神村ドブキヤシヨルに帰りましょう！」

聖ラーマクリシュナ「ハツハツハ……、まアお待ち。馬車賃の三ルピーニアナは誰が払うんだい！  
強情はつてみてもしょうがないさ。一アナも持っていないのにカラ威張りしたって！ それにこんな夜おそく、どこで食べさせてくれる！」

だいぶ経つてから、「支度がととのいました」という声。タクールたちはほかの会員たちといっしょに席へよばれた。

大ぜいの人にまじつて、タクールはラカールや校長といっしょに二階にお上がりになった。あまり混みあっているのです、坐る場所が見つからない。やつとのことですらカールと校長は片隅に席を見つけ、タクールに坐っていただいた。

その場所は汚れていた。一人のバラモンの女性が野菜カレーを配ってくれたが――タクールはどうもこれには食欲がお出にならぬようだった。ルチにちよつと塩をつけて召し上がり、その後、菓子を少々おとりになった。

タクールは慈悲の海である。この家の主人たちはまだ年齢としが若いのだ。彼らがタクールへの奉仕の仕方を知らぬからといって、どうしてお気を悪くなどなさるであろうか。こんな場合に、タクールが



何も召し上がらずに立去られたならば、この家にとって大そう不吉なことになってしまふのである。それに彼らは、神様のことを思つてこうしたあらゆる準備をしたのだから。

食事がすむと、タクール、聖ラーマクリシュナは馬車にお乗りになった。さて、馬車賃は誰が払うことになるのか？ 主人側の人たちは、その辺に見当らない。

この馬車賃について、後でタクールは信者たちに向かつてさも愉快そうにお話になった。

「誰かが馬車賃をもらいに行つた。そしたら最初は追ン出されてきたよ！ もう一度行つてやつと、三ルピー出してもらつたが、あとニアナはどうしてもくれないんだ！ 三ルピーでたくさんだ、と言つてね！」